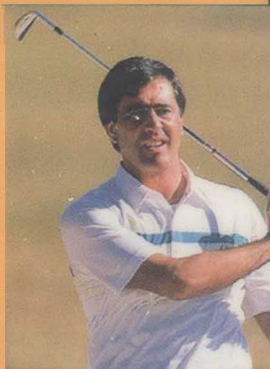
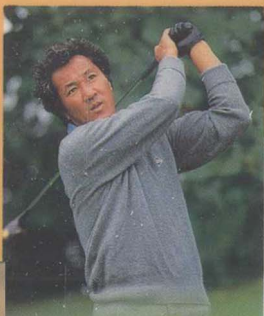


[illegible]



伊佐千尋

フーテンのダンギ

文藝春秋

伊佐千尋 (いさ・ちひろ)

1929(昭和4)年、東京に生まれる。78年

「逆転」で第9回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞。82年「陪審裁判を考える会」を発足。著書に「検屍」「炎上」「司法の犯罪」「法廷」、訳書に「トレビノの破天荒ゴルフ人生」「若きチャンピオン・セベ・パレストロス」がある。

フェアウエイのギャングたち

昭和六十二年一月十五日 第一刷

定価 一二〇〇円

著者 伊佐千尋

発行者 西永達夫

発行者 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話(〇三)二六五・一二二一

印刷 共同印刷

製本所 矢嶋製本

万一、落丁乱丁の場合は

お取替致します

© Chihiro Isa 1987

Printed in Japan

ISBN 4-16-340820-7

フェアフェイのギャングたち／目次

二百七十万円のパット	7
初めての賭けゴルフ	22
オービル・ムーディとの賭け	34
ビリー・キャスパーとの出会い	53
A・パーマーのジョーク	66
バギオの休日	82
オトコのサイズ	99
マスターズ観戦記	114
ワトソンとの賭け	133
オバちゃんの挑戦	146
ゴルフを最悪にした日本人	155

青木功の4番ウッド	166
最後に使った〃手の5番〃	175
大負けした俳優K	188
T・ワトソンの抗議	198
ゴルフに見る性格	209
母の詫び状	218
母の日の贈り物	228
ゴルフ・ウイドウ	238
恐怖の〃デスピカ族〃	249
パートナー〃三つの顔〃	258
グッド・アフタヌーン・ゼネラル	268

装幀 高麗隆彦

写真提供 ゴルフダイジェスト社

フ
エ
ア
ウ
エイのギ
ヤ
ン
グ
た
ち

発表誌／「諸君」昭和58年1月号～12月号（『週刊ゴルフダイジェスト』に掲載分も参考にしました）

二百七十万円のパット

「あなた、ちよつとお話があります」

改まって妻にそう言われると、世の常の夫ならば大抵はドキツとする。

——さては、旧惡露顯におよんだか？ それとも、近くはあの女のことか？ ばれたのかな？

努めて平静を装い、校長先生の前に呼び出された小学生のようにしおらしく、

「なんだね？ また隣の雑犬が、うちの血統正しいスージーにモーションでもかけてきたというのかね？」

とぼけたことを言いながら、内心は恐る恐る、少し離れて妻の前に腰をおろす。

「あなた」彼女の声はいつになくきびしい。「少しは、家計のことも考えていただかねば困ります」

——なんだ、そんなことだったのか。

ほっと胸をなでおろしつつ、

「そうだね、うちは少しスーパーから缶詰め類を買いすぎるんじゃないのかな。とくに、あのフランスのイスカーゴってやつ、ガーリック・バターをきかせると、すてきにうまいけど、少々値

段が高すぎるな。あれはオーバー・プライストだね」

「缶詰めのことなんかじゃありません」

妻のピシヤリとした声が返ってきた。

「それに缶詰めだったら、いくら買っても、二十七万円にはなりません！」

「……」

目の前に差し出されたのは、一枚の支払い済み小切手である。

Bank of America

Naha, Okinawa

¥2,700,000——

金額だけが、目の中に飛び込んできた。忘れかけていた痛みが、チクリと胸を刺す。まぎれもなく、それは、ひと月ほど前に自分が書いた小切手だ。

アメリカ銀行の場合、小切手は日本の銀行とちがつて支払い後、マイクロ・フィルムに撮り、小穴をあけて振出人のもとに送り返してくる。もちろん、ステートメントもついていて金の出入が明記され、残額は当行にお出でくださればお知らせします、なんて横着なことは言わない。

だが、この場合、僕にとっては痛し痒し、いやむしろ日本の銀行のように知らん顔してくれていた方がありがたかった。支払い済み小切手など送り返してくれなければ、妻の目にふれることもなかったろうし、金額も知れずにすんだのにと、いささか恨めしい気持ちだった。僕のパーソナル・チェック・アカウントは、妻といっしょのジョイント・アカウントになっているから、銀行からの通知は両名宛にくる。中味を見られても、文句は言えない。

「あなたが、自分で働いて作られたお金ですから……」

妻の声は、意外に冷静であつた。

「どう使われようと、勝手といへば、勝手です。でも、よく考えてみてください。子供たちはまだ中学生——これから高校を出て、大学へ進まなければなりません。あなたが米軍と折り合わずに会社を閉めた気持ちはよくわかります。あなたらしいと、むしろ誇りにさえ思っています。ただ、それ以来、あなたはよいチャンスやオファーがあつても実業には全然興味を示さず、ゴルフとお酒に明け暮れています。いままでよく働いたんですから、それもしばらくの間はいいでしょう。でも、もう何年になると思いますか？　こんな生活をいつまで続ければ、気が済むのですか？　いつかは銀行にあるお金もなくなりませう——あなたが思っているより、ずっとずっと早く。

“No horse can go as fast as the money you bet on him.”（人間が馬券を買うより、早く走れる馬はいない）

賭け事について、そんな諺がありましたね。

“Money can be lost in more ways than won.”（金は勝つより負ける道の方が多いもの）

とか、自分でも言つてたじゃありませんか。もつとも、あなたは勝つたお金なんぞみんな外で使つてしまつて、私には出ていくお金だけしか見えませんか」

妻のお説教は、なおも続いた。

「仕事をしないで、ゴルフを毎日、ポーカーを毎晩なさつても、今のところ私は文句など言いません。ギャンブルもほどほどになさるのなら、こんな苦情も申しあげません。でも、一ラウンドのゴルフに、二十七万もの大金を賭けるなんて、頭が少し、いや大変、どうにかしているんじゃないですか。

ともかく、いつかは好むと好まざるにかかわらず、あなたは小説でも書かなければならない破

目になりますわよ。ほかに能がなく、仕事もしたくないというんだから、仕方ないじゃありませんか。——もつとも、その道にしても能がおありなのか、ないのか、私にはわかりませんけれど……」
なにをいわれても、返す言葉がなかった。すべて妻のいうとおりなのである。ひたすら平身低頭、恭順の意を表わし、沈黙を守るだけである。

沈黙を守りつつ、僕は上目遣いにテーブルの上におかれたブルーの小切手に目をやった。

「二十七万円といえば、一家がつましく一カ月を暮らすのに十分すぎるほどの金額です。それを一ラウンドのゴルフで負けてしまうなんて、正気の沙汰じゃありません。それも一回かぎりならよいけれど、このところ何枚もチェックを書いていますわね。それでは、私がいくら家計簿をつけてみたところで、始まらないじゃありませんか」

話はまた、そこへ戻った。

妻はまだ小切手の額を一桁まちがえていて、二百七十万円であることに気が付いていない様子だ。

——二十七万円でこれだけ文句を言われるのだから、ゼロが一つ多い二百七十万円と知れたら、いったいどういふことになるのだろうか？

それこそ一大バニックを招来する。この時代、2DKぐらいの家だったら、三軒はらくに買った金額なのである。

僕は思わず、身震いした。そして、さり気なく、テーブルの上の小切手に手をのばすと、お説教に夢中な妻に気付かれないように無事、胸ポケットにおさめる作業に成功した。

小切手を手にしたことで、さきほどの胸の疼きがまたチクチクやってきた。

金のことではない。それはもう終わった。その金額を小切手に書く屈辱を余儀なくされた、あ

の痛恨のスリー・バットと愚かさが再び、新たな痛みとなって思い出されてきたのである。

ところは、泡瀬^{アワセ}ゴルフ場の十八番グリーン。

試合は、ダブルスのベスト・ボール。日本ではあまりはやらないが、最近の日米対抗で青木やワトソンがそれぞれのパートナーと組んで戦うあれと同じ競技である。二対二のマッチ・プレーで、よい方のスコアをとり、フォー・ボールというのが正式の呼称らしい。

十七番を終えて、そのホールは勝ったものの、僕たちのチームは、依然3ダウン。百万円を賭けていたのだが、サイド・ベットもあって合計百三十五万の大負けであった。

最後のティー・グラウンドで、パートナーのマウイ・石津に相談すると、

“Go for broke!”

当たって砕ける、というわけである。

石津はハワイのマウイ島出身の二世で、3ハンディキャッパー。本名のリチャードを誰も呼ばず、マウイが通称だ。

残された道は一つしかない。ハワイアン・スタイルの“アロハ・プッシュ”あるのみ。これに勝てば、負けた分は全部消えてイーブンとなるが、負ければ倍——いわば切羽詰まった背水の陣、というより玉碎戦法だ。

十八番ホールはパー4だが、距離は短く、パーをとりやすい割には、ボギーもよく出る。ティー・ショットもクラブの選択とともによく考えて打たないと、左右はOBだし、バンカーによくつかまる。ラフに入れば、灌木が多く、2オンが難しくなる。

グリーン後方はフェンスとOB、前方と左サイドのバンカーも曲者だ。だが、なによりも強い

芝目と急な傾斜が、簡単にみえるパットを思わぬミスに誘い込む。

「ゴルフという不思議なゲームのなかで、最も不思議なゲームは「パッティング」だ。“A game within a Game”（ゲームのなかにおけるまた別のゲーム）とスコットランドではいうのだそうだが、二五〇ヤードのドライブも僅か一インチのパットともにスコアの上では１ストロークだ。それが不思議に思えるときもあるけれど、パットをする人の心理状態やプレッシャーによって、ゲームが千変万化する不思議さを言っているのであらう。

さて、チーム・マッチの場合、パーではなかなか勝つことができない。最終ホールで生き返るには、なんとしてもバーディをとって負けた分を消さなければならぬ。

ドライバーの得意なマウイが先に打ち、花道をねらって惜しくもバンカーにつかまった。

残された僕としては、セーフにプレーすべきなのだろうが、起死回生を計るには、果敢な攻撃が要求される。OBを恐れず、スプーンで右の境界線ぎりぎりのところを狙い、フェイドをかけて四畳半と呼ばれるバンカー右側の絶好の場所にボールを落とした。そこからはグリーンの傾斜を利用してピンをデッドに狙うことができる。

パートナーのマウイはバンカーからうまく脱出し、少し遠いが２オンを果たした。

敵^{オポニメント}方はとみると、一人は大切なショットにコチコチになってダフリ、漸く３オン。もう一人はバーディを十分に狙えるよいところへつけた。ただし、アップヒル・ライン。

僕のウェッジ・ショットはうまくいった。欲をいえば、ピンの下方につけたかったが、左側四フィートの地点にぴたりと止まった。バーディは目前のような気がした。

いよいよ、パッティング。ここが正念場だ。

“The hole looks so small.”（ホールがぐやに小さく見えるな）

マウイがバットする前、口の中でなにやらブツブツ呟いたが、最初のバットをショートするのではないかという予感がした。

「大胆にバットするものには、ホールは大きく見えるもの」という言い伝えがある。

長いバットの距離だし、3パットの危険は多分にあるが、ビクビクしているから、ホールが小さく見えるのだ。

はたして彼のファースト・バットはかなりの距離を残してショート。次をまたミスしてとうとうボギーにしてしまった。

オボーンネットたちは、たがいのパッティング・ラインを読みあい、まず3オンした一人が一発バーを狙ったが、これは入らず、ボギーとなる。彼がバーをとっていれば、パートナーはバーデイを狙って果敢に打てる。だが、ダウンヒル・ラインとなれば、一人がボギーであるだけに話は別だ。いわゆるホーラブル・バットの近さではない。

2パットを慎重におさめて、バー。

僕のバーデイ・バットはさして難しそうにはみえなかった。ホールがマウイとは反対に大きく見えた。こういうときには、しびれない。

だが、一見簡単に見えて四フィートのバットというのは、ミスするには十分の長さなのである。入れても傲慢にならず、ミスすれば地団太踏む厄介な距離だ。パートナーにも恨まれる。

バットのスタンスをとりつつ、僕は自身に言い聞かせていた。

「しびれるな、ファームに打て！ Never up, never in！」

レオ・デージーエルというバットの名手は僅か二フィートのバットをミスして、一九三三年、

全英オープン優勝のチャンスを失った。

一九六六年のマスターズでは、ゲイ・ブリューアがショート・パットを弱く打ちすぎ、これまた優勝カップを手にすることができなかった。

ダグ・サンダースも一九七〇年、全英オープン優勝を目前に三フィートのパットをミスして、ついに栄冠を逸した。

これらのパットは、いずれも一〇〇万ドルの価値があったのだそうだが、僕にとっては百三十五万円を消すパットも同様に重要だ。

意を決して、僕はストロークした。決してわるいパッティングではなかったと思う。だが、しびれを警戒するあまり、少し強すぎた。そのため、ボールはカップの高い方——プロ・サイドをそのままよがり、非情にもブレークしなかった。サイドからのパットだから、アンデュレーションをよく観察して、攻撃ルートを細心にさがすべきだったのだが、平坦なグリーンでばかり練習していた僕には、まだそのようなデリケートな洞察力がなかった。

残された短いパット——目をつむって打つても入る——を、どうしてミスしたのか僕には思い出せない。きつとディーゼルやブリューアのように全身を硬直させ、手足をふるわせてパットしたのではないか。

ライフ誌の表紙に出ていたブリューアの写真のように、口をあけたまま、信じられないといったスチュ・ピッドな表情をしていたにちがいない。

“Oh, my God!”(おお神様ー)マウイが天を仰いで長歎息した。“What am I going to do? I've got eight kids waiting for milk at home.”(ワシはぶらしたらいんだ。家には子供が八人もいてミルクを待っているというのに)